

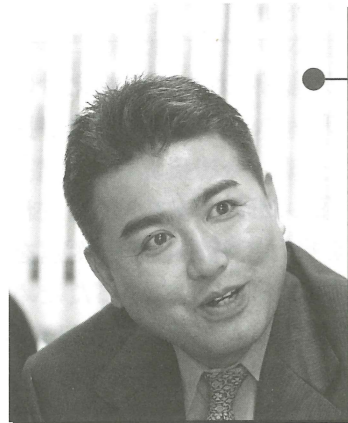
エンジニア

Engineer

農村部の貧困に苦しむ人々のやる気と自信を引き出すために

京都大学大学院工学研究科 社会基盤工学専攻
教授

木村 亮 氏



Profile

| | |
|-------|---|
| 1982年 | 京都大学工学部土木工学科卒業 |
| 1985年 | 京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修了 京都大学工学部交通土木工学科助手 |
| 1993年 | 博士(工学)授与 |
| 1994年 | 京都大学工学部交通土木工学科助教授 |
| 2006年 | 京都大学国際融合創造センター教授 土木学会において土木学会誌編集委員長、地盤工学会において技術者教育委員会委員長などを経験 現在、地盤工学会総務担当理事、NPO道普請理事 |

農村部の貧困に苦しむ人々のやる気と自信を引き出すために「自分たちの道は自分たちで直せる」という意識を広げたい。開発途上国の貧困削減のため、工学的発想から住民による住民のための道直し活動を推進する京都大学木村亮先生をご紹介します。

— 開発途上国の貧困削減に取り組むこととなったきっかけを教えてください。

木村 1993年から7年間、ケニアにODAで設立された大学でJICA専門家として教育活動を行ったことがきっかけで、2000年からJICAアフリカ人作り拠点プロジェクトに国内委員として参画することとなりました。このプロジェクトが、アフリカ人研究者の研究に予算を配賦し、その研究成果を農村の貧困削減に活用することを目標としていたことから、農村の貧困削減をテーマに活動を行っています。

— 農村の貧困削減が、なぜ道直しにつながったのでしょうか。

木村 農業に関する研究は、アフリカの地に合った新しい作物を作り出す、薬として有用な菌を発見するなど、直接的な効果の見られるものがありました。工学分野においては、ある意味、自明ともいえそうですが、直接、農村の貧困削減につながるテーマが見つかりませんでした。

では、工学分野では何をすればいいのか、考えた結果が「住民参加の道直し」でした。それまでにケニアに滞在した経験から、雨季にぬかるんで使えなくなる道路をたくさん見ました。農村で道が使えなくなると、農産物を市場まで運べないから、収入を得られなくなる。枝線をしっかり整備しなければ、住民はいつまでも貧困から脱出できないんです。普通に農民が使う道が整備できれば、安定して農産物を出荷することができる。農産物を出荷することで、農村の住民も安定して収入を得ることができるようになると考えたのです。

— 道直しの材料として土のうを選択し、住民に行わせることとしたのはなぜでしょうか。

木村 よいものをよりよい方法で作るためにはどうすればよいか。直感的にコンクリートではだめだと思いました。海外か



ウガンダの整備前の道で



農民自らが行う「土のう」による道なおし



パプアで最初に道を作った人々

エンジニア

Engineer

らの支援で重機を持ち込みコンクリートで道を整備しても、技術や資機材がないため、維持管理を継続していくことができない。維持管理まで含めた比較的簡単な方法、かつ技術移転が容易な方法がないかと、村を歩きながら考えていたら、木と土、すなわち自然素材を活かす方法を思いついたんです。木でいかだを組んで土を袋に詰めて土のうを積上げる。

そして、道直しの担い手として、農閑期に余る村の労働力、老人、そして子供に着目しました。土のうは1袋25kg。一般的な日本人にとっては、重労働でもアフリカの人々にとっては、なんてことはない重さです。体のつくりが違いますからね。

初めは、自分たちには何もできないと思っていた住民たちが、土のうによる道直しに取り組んでいるうちに、自分たちでも直せると分かってくると、自分たちの生活は自分たちの力で改善できるという自信につながると考えたのです。実際に、自分たちで道直しを進める意欲も出てきたし、土のう袋代や土を運搬するトラック代を出してもらうように、住民自らが政府に働きかけるようになってたりもしました。

— 住民のやる気を引き出すために工夫されたことはありますか。

木村 住民に手柄を立てさせてあげることです。道直して生活環境を改善すれば、脚光を浴びてヒーローになれる。“土のう技術者1級”のような賞状を手渡したりもしました。脚光を浴びれば、さらに、やる気につながるのです。また、道直しが成功したところへ市長をお招きして、市長に手柄を持たせるといったことも行いました。

— 現在の活動状況をご紹介いただけますでしょうか。

木村 2005年から現在までにパプアニューギニアをはじめ、フィリピン、ケニア、タンザニア、ガーナなど11カ国で活動しています。2007年にはNPO法人道普請人を設立し、当初2百万円程度だった事業費も昨年度は3千5百万円程度まで広がってきています。NPOとしては、2010年3月までで11,275mを補修しました。

活動の特徴は、国ごとに事業の進め方が異なることです。国際NGOと連携して行うケースや現地大学の参加により進めるケース、青年海外協力隊を通じて行うケース、現地でNGO登録して進めるケース、公的機関や民間企業の公募に応募して採用されるケースなど、現地に合った進めかたで活動しています。

パプアニューギニアとケニアには現地事務所を構えており、日本での日常生活レベルを維持しながら活動を展開することもできるので、これらを活用した国際協力のフィールド提供も事業として行っており、参加者からは「自分の世界が広がっていく実感を得た」など、好評を得ています。

— 木村さんをこの活動に駆り立てる原動力は何でしょうか。

木村 さまざまな人との出会いです。土木技術者に限らず、面白い人が集まって、自由な発想を具体化していく。またいろいろな人にチャンスを与えることで、その人が育ち、新たな発想が生まれ、具体化していく。何が生まれてくるかわからないことが楽しくて、この活動をやっています。私の趣味といってもよいと思います。

もうひとつは、住民が感謝の気持ちを示してくれることです。日本では見えにくくなった公共事業のありがたみを、整備ができるたび、住民が感謝の言葉で示してくれる。土木技術者の本懐をダイレクトに味わえる醍醐味があります。本日はお忙しいところ、貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

(聞き手：堀口 知巳 鉄道・運輸機構 計画部計画課 総括課長補佐)